特225
69

0050790000

0050790-000

特２２５－６９

国民教育大系に於ける高等小学の地位

田中寛一・著

成美堂書店

昭和１２

AHM

特225
69

新高等小學講座

國民教育大系に於ける高等小學の地位

全　田中寛一

成美堂書店

特225
69

國民教育の系統に於ける高等小學の地位

全

田中寛一

一

誕生當時の兒童は、飢渇を覺えては泣き、疲れては眠るといふ如き極めて單純な自然の狀態にあるが、長ずるに從つて、その生活は漸次複雜になり、自然人から社會人に進み、成人に於ては、社會的生活又は國家的生活が中心となり、そこに理想又は價値を追求する樣になる。敎育は、實に、この自然の狀態から漸次、此の理想の生活へと指導し、誘掖することであるといつてよい。理想の生活の追求には、どこまで行けばよいとする限りはないのであるが、學校敎育には年限の上に於て一定の限界がある。卽ち、幼稚園、小學校、中等學校、高等專門學校といふ課程を卒へるならば學校敎育は一先づ完了するのである。學校敎育を卒へたものに對して、或は研究所があり、或は講習會があるのは、なほ一層の向上を期するがためであつて、この種の機關は或る意味に於ては自己敎育であり自己修養の爲のものである。而して、修養は人間一生の間繼續すべきものであるが、學校敎育には制限がある。從つて、學校敎育は一生の修養に對する基礎的のものであるといふことになる。

基礎的の敎育としては何歲から始めて何歲にまで及ぶべきであらうか。義務敎育の年限は卽ち、この期間を示したものである。我が國に於ける現行制度では、滿六歲から學校敎育を受け始めて、六ヶ年の尋常小學校を卒業すべきこ

ととなつてゐる。けれども、學校教育が、これだけで充分でないことは明かであつて、從つて各種の上級學校が存するのである。上級學校が存するとしても、併し誰でもが入學し得るわけでもなく、また誰でもが入學してよいといふわけでもない。例へば中學校に就いて考へてみても、五ヶ年の修業年限を卒へるまで學校生活をさせるだけの資力のないものもあるし、また學校の所在地があまりに遠くて就學に不便な場合もあり、また兒童の智能が五ヶ年の課程を修める程優れてゐない場合もある。高等女學校などに就いても同樣のことが云へる。父兄の資力と通學の便利といふ點から云へば二ヶ年乃至三ヶ年程度の學校が各町村毎に設立されることが望ましい。而も國民の多數の家庭の望むものはこのやうな學校である。高等小學校はこのやうな要求に基いて、各地に設立されたものであつて、尋常小學校に次いで我が國の多數の兒童を收容してゐる機關となつて居る。昭和六年度に於ける全國の主要な學校數を擧げてみれば第一表の如くである。

第一表　全國に於ける主な學校の校數（昭和六年度）

種別	學校數
小學校	25665
内訳 尋常小學校	7090
内訳 尋常高等小學校	18414
内訳 高等小學校	161
師範學校	104
中學校	558
高等女學校	980
高等學校	32
大學	46
專門學校	111
實業專門學校	52
實業學校（甲）	807
實業學校（乙）	196

第一表によれば、尋常小學校は二萬五千五百四校で、高等小學校は一萬八千五百七十五校あることになる。中學校の五百五十八校、高等女學校の九百八十校に比して著しく多數に上る校數といはなければならぬ。從つて高等小學校に在學する兒童は多數に上るのであつて、全國的にいへば、尋常小學校卒業者の約七割は高等小學校に入學するのである。この點に於て高等小學の教育は、學校教育に於て重要な地位を占めてゐるものと云はねばならぬ。

二

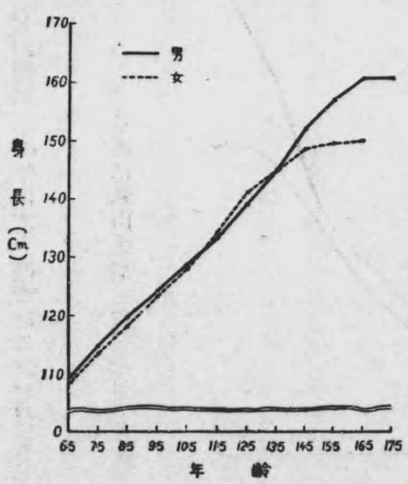
次には高等小學校時代の兒童の心身の特質からみて、この時代の教育が如何に注意すべきものであるかを考察してみたい。最初に身體的方面に就いて述べてみよう。

第二表は丸山良二氏が東京市内の兒童生徒の身長の發達について調査した結果である。此の表に於ける平均身長を男女別に圖示すれば第一圖の如くである。

第二表　東京市兒童生徒の身長發達（丸山氏）

男子 年齡	男子 平均 (cm)	男子 標準偏差	女子 年齡	女子 平均 (cm)	女子 標準偏差
6:6	109.9	4.7	6:6	108.9	4.5
7:5	114.8	4.2	7:5	113.7	4.7
8:5	119.8	4.7	8:5	118.4	4.8
9:5	124.2	5.0	9:5	123.2	5.3
10:5	128.5	4.9	10:5	127.9	5.7
11:5	133.1	5.4	11:5	134.3	6.4
12:5	139.1	6.8	12:5	141.0	6.6
13:5	145.0	8.9	13:5	144.9	5.6
14:4	152.0	7.5	14:5	148.8	4.6
15:6	157.2	6.6	15:5	149.7	4.6
16:5	160.7	4.8	16:5	150.1	4.9
17:5	160.6	5.6	—	—	—

第一圖　東京市の兒童生徒の身長發達



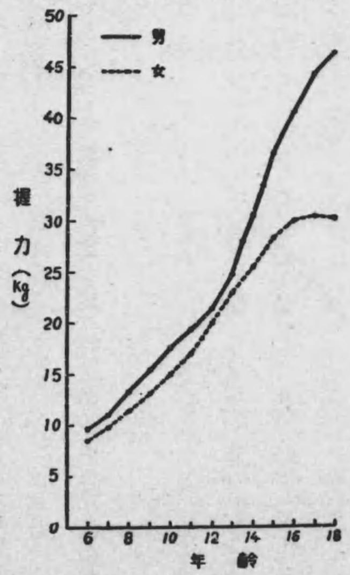
この圖表に於て十二歳五ケ月が高等小學第一學年に當り、十三歳五ケ月が同第二學年に當るのであるが、兒童の身長はこの時期に著しい發育を遂げることが分る。

次に身體の機能の一方面である握力の發達を見るに第三表に示す如くである。これは丸山氏が名古屋市兒童生徒について、スメドレー氏握力計を用ひて檢査した結果である。

第三表　年齢による握力の發達
（丸山氏）

年齡	男子 平均	男子 標準偏差	女子 平均	女子 標準偏差
6	9.7	2.0	8.5	1.5
7	11.0	1.9	9.9	2.2
8	13.2	2.0	11.6	2.0
9	15.4	2.5	13.1	2.0
10	17.6	2.4	15.0	2.3
11	19.3	2.7	17.1	2.4
12	21.5	3.5	20.1	2.9
13	24.9	3.8	23.0	4.0
14	30.6	6.4	25.6	3.7
15	36.8	4.4	28.3	4.1
16	40.7	5.3	30.0	3.9
17	44.3	5.7	30.5	3.9
18	46.2	6.4	30.1	4.0

第二圖　年齡による握力の發達



第三表を圖示すれば第二圖に示す如くである。第二圖によれば、握力の發達に於ても身長の場合と同樣に、男女によつて一、二年の差異はあるが、とにかく十二歳乃至十五歳といふ高等小學校時代に著しい發育を遂げることは明かである。

次に高等小學校時代に生理的變化を生ずることを示すために、女子の月經に就いて調べてみよう。松林鈴三氏は大正十二年四月から昭和五年三月に至る滿七年間に亘つて、廣島市高等女學校在校生徒全部について月經の開始年齡を

調査して、その結果を發表して居る。その調査によると初潮年齡の分配は第四表に示す如くである。

第四表　廣島市高等女學校生徒の初潮年齡の分配
（松林氏）

年齡	人員	人員百分比
11:0—11:11	7	0.9
12:0—12:11	88	11.3
13:0—13:11	284	36.5
14:0—14:11	281	36.1
15:0—15:11	98	12.6
16:0—16:11	15	1.9
17:0—17:11	4	0.5
18:0—18:11	1	0.1
計	778	99.9

平均年齡　14歳0.1月
標準偏差　11.3月

第四表によれば、初潮年齡の平均は十四歳であつて、從つて五〇%の人員は十四歳までに初潮を見るわけである。即ち高等小學校時代にこのやうな生理的成熟を示すことは國民の保健上からも極めて注意すべきことである。

三

以上に於て、高等小學校時代の兒童は、所謂青春期であつて、身體發育上著しい發達を示すものであることを述べたが、身體に於ける上述の如き變化は、やがて、此の時期に精神的方面に於ても著しい變化があるであらうと推定せられる。

先づ自殺について調べてみよう。動物や幼い兒童は自殺しない。蓋し、自殺は理想や軌範の意識のあるものに於て初めて、見られる現象であるからである。即ち、自己の現實を規範に照し、そこに矛盾抵格を感じて自殺するものが多いのである。いはゆる自覺がなくては自殺しない。それでは、自殺は何歳頃から現はれるであらうか。今、我が國內地に於ける昭和九年の年齡別自殺數を示せば第五表如くである。

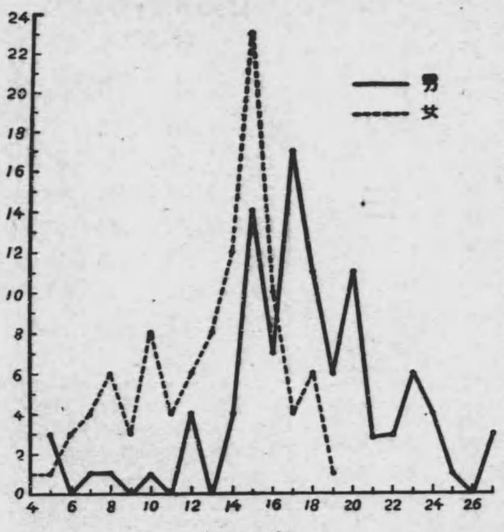
自殺者數に就いては老年に至るまで調べられてゐるけれども、こゝにその全部を擧げる必要は無いから、四十歳以上のものに就いては略しておく。第五表によれば十歳乃至十四歳の頃から自殺の傾向が現はれ、十五歳乃至十九歳に於ては判然とその人員が多くなり、二十歳乃至二十四歳に於て最も多數であつて、それから漸次減少する傾向を示して居る。

第五表　年齡別自殺人員（昭和九年）

年　齡	人　員
0—4	0
5—9	1
10—14	85
15—19	1664
20—24	2568
25—29	1548
30—34	1065
35—39	900
以下略す	

次に、自覺が出來れば、煩悶を生ずることが多く、その結果は宗教上の信仰に入るものが少くない。石神德門氏の調査によれば、宗教上の信仰に入る年齡の分配圖は第三圖のやうである。

第三圖　入神の年齡（石神氏）

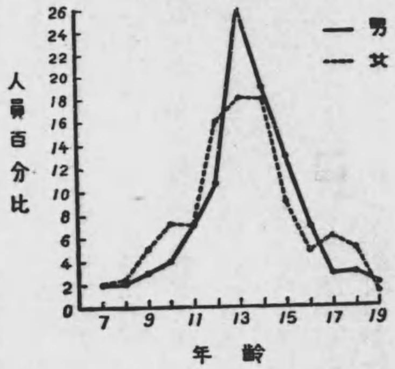


第三圖によれば女子は男子よりも少し早く宗教上の信仰に入るやうであるが、男子は十三四歳の頃から神へ歸依する傾向を示し、十七歳に至るまで漸次その人數の增加する傾向を示して居る。

玉置修氏は男女師範學校及び高等女學校の上級の生徒に就いて、教師から最もよい影響を受けた當時の年齡を調査したが、その結果は第四圖に示す如くである。

第四圖によれば、著しい好感化を受ける年齡は十三、四歳を中心として前後一、二ヶ年の間である。即ち高等小學校時代は、感受性が强く、意圖的感化を與へるに最も好い時期のやうである。

第四圖　好影響を受けた生徒の年齡（玉置氏）



丸山良二氏は東京の兒童生徒に對し「學校へ通つて勉强してゐるわけ」と題して十五の答案を提出し、その一つを選ばせて、兒童生徒の思想の傾向に就いて調査して居る。その調査に於て最も多數の兒童生徒が選んだ勉學理由は次の三種である。

第四答。私は學校を卒業しても、なほ勉强をつゞけて、やがては偉大な發明や發見をして、學問の進步を助け、世の人々の幸福を進めたいと思つてゐます。

第十四答。勉强すればする程、世の中のいろ〳〵のことが分り自分の生活についても反省してみるやうになり、從つて意味あるよい生活をするやうになります。それで學校へ通つて勉强してゐます。

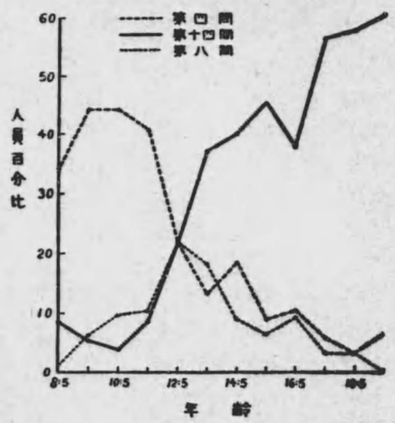
第八答。平生の自分の行爲について、その善惡がわかり、自分の心もよくなり、行爲も善くなるので勉强してゐます。

此等三答につき各年齡毎に選擇した人員百分比を示せば第六表の如くである。

第六表　第四，第十四，第八の各答を選んだ人員百分比（丸山氏）

年　齡	第四答	第十四答	第八答
8:5	34.3	8.4	1.1
9:5	44.3	5.5	6.2
10:5	44.3	3.7	9.7
11:5	41:0	8.6	10.4
12:5	21.9	21.9	21.5
13:5	13.1	37.2	18.3
14:5	18.8	40.4	9.0
15:5	9.0	45.7	6.5
16:5	10.1	38.1	9.4
17:5	5.8	56.8	3.4
18:5	3.2	58.1	3.2
19:5	6.5	60.9	0

第五圖　第四，第十四，第八の三答を選んだ人員百分比による年齢的發達



の如くであり、これを圖示すれば、第五圖が得られる。

第四答は、社會的のものであるが、兒童としては外的のものである。この問題を選ぶ人員は學校の兒童生徒の場合では年齢と共に減少する。これに反して、第十四答は自我に眼醒めた內的のものである。これを選ぶ人員は漸次增加する。而して、第八答は自己反省を本位とするものであるが、これを選ぶ人員の最も多いのは十二歳五ケ月前後である。このやうに高等小學校第一學年を中心としてその前後（女子は十二歳頃、男子は十四歳頃）に、思想が外的着眼から內的着眼に轉ずるのである。

これ等の事柄から考へると、今の高等小學校時代は教育上極めて重要な時期で、若しも「鐵はその熱せられて居る時に打つ」べきものであるとするならば、この時期こそは教育上最も注意すべきものであると信ずる。高等小學校時代の兒童は、無自覺から自覺に轉じ、外的から內的へと移り、自我に目ざめるのであるから、人生に於ける一大轉回期といふべく、それだけその保護と訓練とに對しては深甚の注意を拂はなければならないのである。

四

前には、高等小學校時代に兒童は外的着眼から內的着眼に轉回するといふことを述べておいた。尋常小學校時代までの兒童は、世の中の表面にのみ心を奪はれてゐて、その職業希望にしても例へば、自動車運轉手、飛行士、船員、探險旅行家などと答へるものが多い。世の中の多くの物を見るとか、冒險を經驗するが、大いに金を儲ける爲に商人となるといふやうに、その志望が外的理由によつて規定されてゐる。それが高等小學校時代になると、職業に於ける天職の意義を知り、職業に對する適不適を理解するやうになる。從つて高等小學校に於て本當の意味の選職指導が出來るのである。

高等小學校時代の兒童は自ら自身の長所や短所に注意することが出來、社會に存する各種の職業に就いて內面的に考察し得る。從つて、外觀にのみ捉はれないで、自分の適職を考へるやうになるのである。

丸山良二氏は「一般知能より見たる職業評定尺度」を構成し、それによつて先づ親の職業を評點化し、次にその子の志望職業を評點化し、そうして兩者の差異から子の職業志望の高下點を求めて居る。即ち「子の志望職業點」から「親の職業點」を引いた差を「子の職業志望の高下點」とする。東京市の某地區の尋常小學校第六學年兒童と高等小學校第一、二學年兒童とに就いて調査した結果を示せば第七表のやうである。

第七表　等六及び高一，二兒童の職業志望の高下點の分配（丸山氏）

高下點	高一二	等六
+57—	3	0
+52—	4	0
+47—	5	2
+42—	12	1
+37—	25	2
+32—	45	7
+27—	63	5
+22—	52	8
+17—	97	15
+12—	90	3
+ 7—	191	9
+ 2—	235	10
− 3—	103	9
− 8—	69	7
−13—	59	4
−18—	53	1
−23—	15	3
−28—	6	0
−33—	3	3
−38—	4	1
計	1134	90
中間數	+3.1	+6.7

第七表に於てプラスとあるは、子の志望が親の職業

的地位よりも高いことを意味し、マイナスとあるは子の志望が親の職業的地位よりも低いことを意味する。平均的に見る時は第七表の末端に示すやうに高等小學兒童の點はプラス三・一であり、尋常六年の兒童の點はプラス六・七である。即ち高等小學生の方が尋常六年よりも、職業希望が一層現實的であると見ることが出來る。自分の家庭の職業とか、資産とか、自分の學力等に就いて、高等科の生徒の方が尋常六年生よりも一層切實に知つて居る。さういふ傾向がこの調査に於てはつきりと分るのである。

かういふ結果は、また高等小學校時代の兒童に對して、堅實な思想を抱かせるやう教育し得る可能性の多いことを示唆してゐると思はれる。勿論青春期のことであるから一面には空想的又は夢想的のあこがれもあるのではあるが、他面にはまた現實性の强いことが伺はれる。それ故に職業志望に限らず他の希望に於ても、現實的に、從つて國家的社會的に健全な方向へ導き得る部面が多くなる。この意味に於ても高等小學校兒童の教育はやり甲斐のある重要なものといはなければならぬ。

五

幼兒の住む世界は家庭であつて、而も父母兄妹に愛されつゝ育つのであるから、一般に自己中心的であつて、獨りで遊ぶ傾向が强い。それが尋常小學校時代になると家庭的環境から離れて社會的關聯の中に生活するやうになる。即ち他の兒童と共に「子供の社會」を構成して、その中に於て遊ぶのである。一般に友達に愛著を感じ、統率兒童の下に仲よく遊ぶ。然るに高等小學校時代になると、兒童の身體は急に大きくなり、力量も著しく强くなるので、今までの成人に對して服從的であり、畏敬的であつたものが、「自分も成人になつた、今までのやうに服從的でなくてもよい、對等のものになつた」といふ感じが湧いてきて、一般に反抗的の傾向を帶びてくる。そして友達と共に構成した「子供の社會」は、前の時代よりも一層密接に組織されるやうになり、他の仲間と對立的になる場合が多い。いはゆる團體のためには秘密を守り、團體に對する義務とか責任を履行しなければならぬと强く感じ、それを實行するやうになる。そしていはゆる團員たることを明かにするために徽章を用ひたりすることがある。

この頃の競爭は、個人的のものでなくて、群團對群團といふやうになる。このやうに「兒童の社會」が確固なものとなり、組織的のものとなるといふことは、社會生活の訓練として極めて重要であるといはなければならぬ。この時代に社會人となる稽古をするのである。併し乍ら若しこの時期に適切な教育的指導を缺くならば、兒童はみだりに徒黨を組み、自己の利害のために行動するやうになる恐れがある。彼等の生活をして共同的ならしめ、その競爭をして反社會的でないやうに指導し、相互に協力し、融和し、尊敬し合つて、眞の社會的生活をなすやうに指導することが肝要である。この意味に於ても十三四歳頃の兒童の教育は極めて重要なものといはなければならぬ。

六

教材を選擇する主要な標準は二つある。その一は社會中心主義であり、その二は兒童中心主義である。前者は國家

的社會的の要求に應じようとするものであり、後者は兒童の心身の發達程度に適應するやうにするといふことである。學校に於ては、この二つの標準或は主義に基いて文化財を精選し、教科目としてこれを適當に分類し、それぞれの內容を教材として教授する。この二つの標準は大方針としては全く正しいのであるが、事實問題としては、とかく兒童の心身の發達を顧慮することが輕視されて、國家的社會的要求が過大となり易い。國家的社會的生活に必要であるから教授するとしても、兒童がこれを攝取して、我がものとすることが出來ないならば、その要求の目的は達成されないのである。

例へば尋常小學校第六學年までに、裁判、帝國議會、租稅、銀行などに就いて教授しても、兒童の心意發達に適應しない表現方法が用ひられてゐるので、兒童の知識系統の中に攝取されない。それでは折角の目的を達成し得ない。然るに、若しこれ等の教材を高等小學校で教授するならば、尋常六年時代の兒童に比すれば、著しい效果を擧げ得る。それは、高等小學校時代の兒童は、心的態度に於て著しい發達を示してゐるからである。經驗も豐富になつてゐると共に、事物や現象の內的方面にも注意し得るやうになつてゐるので、この時代になると案外前述のやうな教材をもよく理解させることが出來るのである。

尋常小學國語讀本卷一から卷十二までに提出されてゐる漢字は千三百五十六字あつて、これ等を全部教へることとなつてゐるが、岡崎常太郎氏が昭和十年三月下旬東京市の尋常小學校第六年兒童に此等の全漢字を書取らせた結果は第八表のやうである。

國家が社會生活上必要として教授しようとする漢字は一千三百五十六字であるのに、東京の兒童は平均して六百九十二字を學習してゐるだけであるといふことになる。要求に對して凡そ半分の成績を擧げてゐると云つても差支ない。これは一概に教師の教授法が下手であるのに基くといふことは出來ない。兒童の生活に適應しないとか、兒童の心意發達に適しないために攝取されてゐないものも多いと察せられる。若しもこれだけの漢字が是非とも國家的要求として必要であるならば、或る漢字は高等小學校で教授することが望ましい。

第八表　1356の漢字の書取成績（岡崎氏）

學校名	人員	平均正答數
I	107	1009
II	67	953
III	54	911
IV	72	763
V	86	711
VI	62	641
VII	93	637
VIII	95	691
IX	85	452
X	127	365
計	848	692

凡そ尋常小學校で十分に練習することが必要だから教へるといつても、尋常小學校の六箇年間では無理を生じ易い。それを二年乃至三年延長して、高等小學校で教へるならば、兒童はもつとよく理解し、よく學習する。これはひとり漢字の書取に限つたことではない。修身、讀み方、算術、理科などの他の教材に就いても同樣のことが云へる。つまり尋常小學校に於ける國家的要求に基づく教材を、高等小學校に於て補充し完成させるといふ意味に於ても、この時代の教育は重要なものといはなければならぬ。

七

前に、社會的要求に基づく教材の學習を完成させる點から見て、高等小學校の時代は重要であると云つたけれども、

これは尋常小學校に於ける社會的要求の完成といふことを述べたのである。その點は誤解してはならぬ。社會的要求の完成といふことに拘泥しすぎて、兒童心意の發達程度に副はない教材の學習を要求してはならぬ。これを職業指導に例をとつて述べてみよう。高等小學校時代の兒童に對して、職業指導は最も重要であり有意義であるけれども、それ故に「徒弟教育」をしなければならぬと云ふのではない。教育は一般的陶冶から出發して、漸次特殊化し、最後に所謂徒弟的の教育となるのが正道である。徒弟的の教育とは特殊化の最も著しいものであつて、これによつてそれぞれの職業人として世に立ち得るのである。然らば高等小學校はこの意味に於て如何なる地位に立つて居るであらうか。

先づ身體の發育に就いて調べてみるに、男子の身長は凡そ十七歳まで、その體重は凡そ十八歳まで、その胸圍は凡そ十九歳まで發達するやうである。女子は男子よりも凡そ二ヶ年早熟である。次に智能檢査を施行してみるに、平均して、十七八歳までは智能點數が上昇する。握力なども十七八歳までは漸次發育する。このやうな發育の見られる時代は、なほ陶冶性に富むもので從つて教育的影響の著しい時代である。(勿論、その以後の教育は全く無效であるといふのではない)かゝる發育の現はれる時代にあまりに特殊化した教育を施すといふことは、兒童の心身の發達を無視した企といつてよい。特殊化された徒弟的教育は、男子に對しては、十八九歳以後でなければならぬ。滿六歳で尋常一年に入學し、十二歳で尋常小學校を卒へ、十七歳で中等學校を卒業し、それから二箇年乃至三箇年の專門教育を受けて、はじめて徒弟的の修業をするのが、普通の人々に對しては順調な過程である。

上述したところは、普通の人々の心身の一般的發育から見て述べたのである。最後には徒弟的修養によつて、一定の職業に從事するのであるから、普通教育の間に職業的關心を持つてはならぬとか、職業指導は不必要であると云ふことは出來ないのであつて、むしろ反對に教育の有終の美を收めるためには、どうしても、職業指導といふことを考へなければならぬのである。そのためには、吾々は更に進んで兒童青年の性能の分化といふことに就いて研究しなければならぬ。即ち、如何なる年齡の頃から個人の性能は特殊化する傾向が著しくなるかといふことである。

丸山良二氏は、加算、抹消、反對聯合、置換及び記憶の五種の檢査を尋常科第三學年から高等小學第二學年までの兒童、各學年約百四十名位づゝについて試み、先づ各檢査の相關係數を算出した。第九表は尋常三年の場合の結果である。

第九表　尋三に於ける各檢査間の相關（丸山氏）

	加算	抹消	反對	置換	記憶
加算	—	.401	.586	.575	.368
抹消	.401	—	.429	.558	.314
反對	.586	.429	—	.597	.423
置換	.575	.558	.597	—	.307
記憶	.368	.314	.423	.307	—

總平均　.456

第十表　學年別性能間の相關及び部分相關（丸山氏）

學年		相關係數總平均	一般智能を恒常とする部分相關係數の平均
尋常	3	.456	.400
	4	.496	.342
	5	.492	.271
	6	.430	.238
高等	1	.438	.197
	2	.358	.159

此等の各相關係數の總平均を算出すると表の下に示してあるやうに〇・四五六となる。このやうな計算を各學年について行ふと、第十表の「相關係數總平均」の欄に示す通りである。これ等の數値を比較すると尋六のところから値が、比較的小さくなつて居る。即ち、此の年齡の頃から檢査相互の關係が比較的少くなることを示すのである。

然るに、右のやうにして二個づゝの檢査間の相關係數を算出しても、

それだけで滿足して居る譯に行かない。それは、例へば加算檢査と抹消檢査の成績の間に本質的には何等の關係のない時でも、その兩者が共に一般智能に關係を有つて居る時には、その一般智能を通して兩者が恰も本質的に關係があるやうな姿を示すものである。故に本質的に相關があるか否かを知るには、先づ一般智能の影響を排除して二つの檢査間の相關を求めなければならぬ。そのためには二つの方法が用ひられる。その一は、一般智能に於て略〻等しい兒童だけについて各檢査間の相關關係を求めるのである。しかし、その爲には非常に澤山のものについて檢査を行はなければならぬから、普通は容易に實行し得られない。そこで第二の方法として部分相關を求める公式を適用して一般智能の影響を除いた場合の個々の檢査間の相關を求めるのである。その公式は次の如くである。

$$r_{12\cdot3}=\frac{r_{12}-(r_{13}\times r_{23})}{\sqrt{(1-r^2_{13})(1-r^2_{23})}}$$

今、假りに加算を1とし、抹消を2とし、一般智能を3で現はせば$r_{12\cdot3}$は一般智能の影響を除いた場合の加算と抹消との相關關係を示すのである。またr_{13}はピアスン氏偏差積法の公式による加算と抹消の間の相關、r_{13}は加算と一般智能の相關、r_{23}は抹消と一般智能の相關である。而して、これ等は實驗の結果から直ちに算出し得る値であるから、部分相關値はそれ等の數値から容易に之を知ることが出來る。

さて、右の公式を今の實驗の結果に適用して得た値は第十表の右方に示してある通りである。これを見ると、その相關係數は年齢の進むにつれて漸次少くなつてゐる。その中で、特に目立つのは高等小學校第一、二學年に於て著しく小さくなつてゐることである。これは何を意味するかといふに、それは、この時期から兒童の性能が著しく分化し特殊化することを示すものである。即ちこの時期から得手、不得手が顯著に表はれて來ることを示すものである。兒童の知的活動は年齢の進むと共に、漸次特殊化し、分化するものであつて、それが十三四歳の時代からはつきりしてくる。從つて、この頃から又はこれより少し前から十分に職業選擇指導及び學校選擇指導に意を用ひなければならぬのである。

高等小學校時代の兒童に對しては、空漠とした指導をするのでなくて、社會の實狀を顧みて具體的に、そして切實に指導すべきである。例へば高等小學校に於て、農業、工業、商業、外國語を課するが如きも、性能の分化を顧みる所以であつて、年齢の進むと共に、その教材は益〻分化して行かなければならぬ。兒童の特殊才能は發見するのではなくて、むしろその志望に應じて、適性を養成しなければならないのであるが、その志望の決定並びに適性の養成上この時代の教育は最も大切なものであることを忘れてはならぬ。若し一歩を誤るならば、兒童自身の損失であるばかりでなく、國家的にも大なる損失であると云ふべきである。この年齢の頃に決定した各兒童の希望に應じて、漸次特殊的の知識技能を學習させ、やがて數ヶ年の修養と修業の後に職業の遂行を通して、社會國家の進運に應分の貢献を致させるやうに指導しなければならぬ。

八

以上述べた所を要約すれば、

(一)高等小學校教育は、一般民衆の教育として、尋常小學校教育に次いで重要な地位をもつものである。それは、そこに學ぶ兒童數が、尋常小學校卒業者の約七割を占める現狀が、これを證する。

(二)高等小學校時代は、いはゆる青春期に相當する時期で、身長の增加の著しい時期であり、力量は增大する時期である。そして女兒にあつては、既に初潮を見るもの〻多い時期である。これは保健の上から見て、極めて重要な時期であることを指示して居る。

(三)年齡による自殺の出現頻數に關する統計、入信年齡に關する統計、教師の好感化を受けた年齡に關する統計、及び勉學の理由に關する統計等の示す所から推定すれば、高等小學校時代は思想的に見て人生に於ける一大轉回期であつて、此の時期の兒童は當さに外的着眼から內的着眼に、無自覺から自覺に轉じ、自我に目ざめる時期であつて、教育效果の最も顯著に現はれる時期であり、從つて、教育上の注意を最も必要とする時期である。

(四)內省的になり、社會のこともよく分る樣になり、從つて、自己を正當に認識し得ることから、將來とるべき職業についても堅實な判斷をなし得る時期である。

(五)一方には力量の增加と聯關して、自己を過信し、長上に對して反抗的な態度が現はれ、他方には社會性の發達につれて團體を組織して、團體に對して忠實な處から、反社會的行動に出でる危險が少くない。それ故に、適當な指導によつて、眞の社會生活に導く必要が特に大である。

(六)教材の選擇の基準からすれば、兒童心意の發達の程度に則する兒童中心主義と將來の社會生活に必要な材料を網羅する立場をとる社會中心主義の二者を滿足せしめなければならぬのであるが、後者の要求は高等小學校時代に於て初めて十分に滿足せしめられるのである。

(七)精神的機能の分化し特殊化するのは、高等小學校時代に於て著しい。このことは(四)に述べた事實と共に將來の方針を定め職業の選擇をする上に都合のよい時期であることを示す。

右述べた數種の事實は高等小學校教育が國民の教育として如何に重要であるかを示し、從つて、國民の總てが、高等小學校時代の年齡を學校生活に費やし、そこで適當に指導せられることの必要を强く感ぜしめるものである。それはやがて、又、義務教育年限延長の心理學的基礎にもなるものである。而して心理學的にいへば、高等小學校の修業年限は二箇年よりも三箇年の方が一層合理的であり效果が多いのである。(完)

昭和十二年四月十日印刷
昭和十二年四月十五日發行

新高等小學講座
（第二回配本）

著作者　田中寛一
東京市日本橋區通三丁目一

發行兼印刷者　河出孝雄
東京市牛込區早稲田鶴巻町一〇七

印刷所　廣文社印刷所

寺田製本

發行所　東京市日本橋區通三丁目一番地　成美堂書店

版權所有